

文化遺産は社会主義の夢を見るか？

——ポーランドのティヒ市における社会主義体制の遺物をめぐって——

開智国際大学 菅原祥

1 目的

あらゆるモノが保存・展示される「博物館学的欲望」(荻野編, 2002)がますます貫徹しつつある現代世界においては、つい四半世紀前に崩壊したばかりの東欧の社会主義体制下における生活の記憶もまた、博物館などにおける展示や保存の対象に、そして海外からの観光客の消費の対象になりつつある。しかし、体制転換後の東欧の各都市における通りの名の変更やレーニン像の撤去などに端的に示される通り、社会主義時代の記憶は 1989 年以降の東欧諸国において集合的な否認と忘却の対象であった。また、それが何らかの形で想起・保存・展示される場合でも、その方法や位置づけるべき文脈をめぐって今なお多くの論点が投げかけられつつある。

本報告では、こうした問題を特に地域コミュニティのローカルな記憶とアイデンティティという文脈に置き直して再考してみたい。とりわけ、社会主義時代の歴史・記憶がそのままある都市の建設・発展の歴史・記憶と分離不可能なほどに深く結びついているような事例を考察することで、社会主義の記憶が地域コミュニティの中でどのように想起・解釈され、日常生活の文脈の中に位置づけられているのかを明らかにしたい。

2 方法

本報告では調査地としてポーランド共和国のティヒ (Tychy) 市を選んだ。ティヒはポーランド南部のシロンスク地方の小都市であり、戦後ポーランドの大規模近代化・工業化計画の一環としてほぼゼロから計画・建設が行われた「社会主義都市」である。ティヒには現在でも社会主義時代に特徴的な建築物や像・モニュメントなどが多く残っている。また近年、ティヒ市歴史博物館がオープンし、地元の歴史に関する展示や出版物の発行などを精力的に行っている。

本報告では、報告者が 2016 年 2 月～3 月に現地で行ったフィールド調査・インタビュー調査に基づいて、ティヒの都市環境、とりわけ社会主義時代に建設された建築物やモニュメントなどが現地の住民やさまざまなアクターによってどのように意味づけられ、解釈されているのかを分析する。

3 結果・結論

分析の結果明らかになるのは、社会主義の遺物を「文化遺産」として意味付けることにまつわる困難と、そうした困難の中で見られる特徴的な記憶の実践である。社会主義体制の記憶がもたらした(ソ連による)抑圧と支配、およびそれに対するポーランド国民の抵抗の歴史として表象され、それと対立するような「ポジティブ」な記憶が(少なくとも公的に是認された言説においては)ほとんど居場所を持たないような現在のポーランド社会において、ティヒの建設・発展という地域コミュニティにとって「ポジティブ」な出来事を社会主義体制と結びつけて語ることは非常に困難が伴う。それゆえ、ティヒにおいて地域の歴史が語られるときは、ある時は社会主義体制以前の歴史・伝統が強調され、またある時はティヒの建築物やモニュメントを社会主義体制よりも広い普遍的な文脈に置き直して語ることが試みられる。このように、人々は逆説的にも社会主義について「語らない」ことによって社会主義時代の記憶を自分たちのものとして順化しているのである。

参考文献

荻野昌弘(編)『文化遺産の社会学：ルーヴル美術館から原爆ドームまで』新曜社, 2002.